

前から読みたいと思っていた本を友人の家の本棚で見つけ、貸してもらいそのまま睡眠時間を削って読みふけりました。舞台は昭和30年代の大阪。主人公の財前五郎は国立大学の助教授。彼は食堂噴門ガンの手術を得意とする外科医でした。腕前は素晴らしいのですが、自分の実力を過信しすぎて時として傲慢さが見えるので、上司である教授からは煙たがられ次期教授の座は選挙で獲得しなければなりません。そのために国立大学の教授という地位を自分の一族から出したいと熱望する開業医の舅・財前又一の財力で教授の地位を獲得します。票を得るために一人に付き十万円も払う場面があり、今の時代でも十万は大金なのに、国立の大病院に所属する助教授の給料が5万7千円という時代ではとてつもなく大金であることが漠然と分かるだけでいまいち金銭感覚がつかめませんでした。印象的なのはドロドロしているのは周りで財前五郎はもちろん事件の当事者であり、傲慢なところがとてもあると思います。しかし彼は根っからの悪人では無かったと言いつのが私の印象でした。悪人に徹しきれなかったために四十六歳という若さで胃ガンで命を落とすことになったように思えました。

新潮文庫

F N .

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞